

付属語「たい」の音調変異

那須 昭夫

キーワード：タイ節、音調変異、起伏化、新型音調、中和、活用形、拍数、有核文節、連用形、構造変化

要 旨

「たい」を含む文節では前接動詞の音調がそのまま文節全体の音調として継承されるが、近年この規則性はゆれ始めており、「平板動詞+タイ」からなる文節が起伏式の音調で現れる変異が観察されるようになってきた。本研究ではこの変異の実態と機序を明らかにするために調査を実施し、変異の成否に影響する要因について考察した。その結果、タイ節での音調変異が形容詞アクセントの変化と性質の似た現象であること・前接動詞の拍数が増すほど変異が生じやすくなること・タイ節周辺に有核文節が存在することが変異を抑制する要因として働くこと・構造変化の大きな形式（-タクナル）では中和指向が鈍りやすい一方で、構造変化の小さな形式（-タクナイ）では中和への抵抗が弱く、より高い頻度で変異を来しやすいことを明らかにした。

1. はじめに

本稿では、助動詞「たい」を含む文節（タイ節）に観察される音調変異の実態について考察する。

タイは「式保存型」の付属語であり、その特徴として、前接する動詞の音調を文節全体の音調として引き継ぐ性質がある（和田 1969; 木部 1983; 匂坂・佐藤 1983; 田中宣廣 2005）。「平板動詞+タイ」からなる文節は平板式で、「起伏動詞+タイ」からなる文節は起伏式で現れるといった具合に、前接動詞における二型の音調対立を維持するのがタイ節音調の特徴である。

しかし、近年この規則性には綻びが生じ始めており、「平板動詞+タイ」からなる

文節の音調が「起伏動詞＋タイ」からなる文節のそれと同じ型をとる事例が観察されるようになってきた。この変異は、従来見られた二型の音調対立を解消する結果をもたらすことから、音調中和現象のひとつに数えられる。

本稿では、タイ節での音調変異の実態を録音調査の結果に基づいて記述するとともに、変異の生起頻度を左右する諸要因について考察する。タイ節での音調変異は全体として5割をやや上回る勢いで起きているが、変異の生起頻度は活用形によりばらつきがある。また、タイに前接する動詞の拍数やタイ節の周辺に位置する文節の音調も変異の成否に影響する。

以下本稿では次の手順で議論を進める。まず第2節において、本稿で扱う現象および関連する先行研究について概観する。第3節では、本研究で行った調査の内容と結果の概要を述べる。そこで示した事実を踏まえて、本稿後半では音調変異に影響をもたらす諸要因について考察する。第4節では活用形と音調変異とのかかわりについて考察し、タイ節の音調変異がその機序において形容詞に生じるアクセント変化と類似した特徴を備えていることを明らかにする。第5節では前接動詞の拍数と音調変異とのかかわりについて考察し、動詞の長さが音調変異の成否に有意に影響していることを論じる。第6節ではタイ節の周辺に位置する文節の音調について検討し、有核文節が近隣にある形式では変異が抑制されやすいことを明らかにする。最後に第7節では、連用形含みのタイ節における変異の実態を分析し、構造保持指向と中和指向という二つの要求のせめぎ合いが音調変異の成否を左右していることを明らかにする。

2. 現象の概要

2.1 タイ節の音調変異

「動詞＋タイ」からなる文節の音調は、動詞の音調をそのまま引き継ぐ形で決まる。平板動詞にタイが接続した文節は平板式で現れ(=1a)、起伏動詞にタイが接続した文節は起伏式で現れる(=1b)。

- (1) a. アソブ＝ アソビ-タイ＝ (遊びたい)
b. ハナ]ス ハナシ-タイ (話したい)

前部要素(動詞)の音調が文節全体の音調として保たれることから、和田(1969)はタイを「いわゆる式保存の法則に従」うタイプの付属語と位置づけている。同様に木

部（1983）も「前部の動詞の式が付属語にまで支配力を持つか持たないか」との観点から、タイを「前部主導型」の付属語に分類している。また田中宣廣（2005:96）は「前接自立語の声調が及ぶ」性質を持った付属語アクセントを「声調式」と名づけ、タイの音調もそのひとつだとしている（田中宣廣 2005:314）。

タイ節の音調形成は上述のとおり規則的であり、前接動詞での二型の音調対立が文節全体にもそのまま反映されるのが特徴である。ところが、近年この規則性に従わないパターンが観察されるようになってきた。「平板動詞+タイ」からなる文節が、本来期待される平板式ではなく、起伏化した音調(2a)で現れる変異である。

- (2) a. アソブ= アソビ-タイ (遊びたい)
 b. ハナ]ス ハナシ-タイ (話したい)

この新たな音調(2a)は、起伏動詞にタイが接続した文節の音調(2b)とまったく同じ型をとるため、結果的に二型の対立が中和してしまうことになる。

タイ節の音調にこうした変異があることについては、すでにいくつかの先行研究に指摘がある。郡（2015）は助詞・助動詞のアクセントを「乗っとられ型」・「乗っとり型」・「協力型」の3つの類型に整理したうえで、タイには「乗っとられ型」と「乗っとり型」の両様のパターンが見られるとしている。「乗っとられ型」とは「前部のアクセント的特徴が複合形全体のアクセントを決める」もので、在来の音調(1)はこれにあたる。他方「乗っとり型」とは「後部のアクセントに合わせる形で複合形全体のアクセントが決まる」もので、新型音調(2)がこれに相当する。

直近改版のアクセント辞典（NHK 2016:222）でも、タイの音調について「[付属語決定型]としても現れる」との指摘がなされている。「付属語決定型」とは「動詞部分のアクセントが消え、付属語のアクセントが生きる」（NHK 2016:224）タイプ
 の音調で、たとえば助動詞「ます」などはこの種の音調を持つ付属語の一例である¹。

アクセント調査を通じて新型音調の実態をとらえた研究としては、栗木（2015）がある。栗木（2015）は東京都内の中学校に通う生徒を対象に調査を行い、調査項目の9割以上において(2a)のような新型が見られたことを報告している。この数値を見る限り、タイ節の音調変異はすでにかかなりの速さで進行していることになる。

¹ 「ます」を含む文節では前接動詞の音調の別を問わず常に一定の型（「ます」の初頭拍で声の下がる型）だけが起こる。例：/モリ-マ]ス/（盛ります）、/ノミ-マ]ス/（飲みます）

しかし、栗木（2015）の調査は終止形の音調のみを対象としたものであり、この点はタイが活用語であることを踏まえると不十分と言わざるを得ない。タイ節での音調変異の全容を明らかにするには、終止形以外の活用形に起こる音調の実態も記述する必要がある。実際、後に見るように、変異の現れ方は活用形によってかなりのばらつきがある。

2.2 音調の中和

ここで、タイ節の在来の音調および新型の音調が、各活用形においてそれぞれのようパターンで現れるか見ておくことにしたい。本稿では終止形・連体形・連用形の音調について検討するが、このうち連用形については、述語動詞に接続する形式「-タクナル」および否定接続の形式「-タクナイ」を取り上げる²。なお、比較のために、起伏動詞にタイが後続した形式の音調（便宜的に「起伏タイ」）も併せて示しておく。

(3) 在来音調と新型音調

	在来音調	新型音調	cf. 起伏タイ
終止形	遊び-タイ=	遊び-タ]イ	話-タ]イ
連体形	遊び-タイ=(N)	遊び-タ]イ (N)	話-タ]イ (N)
-タクナル	遊び-タク-な]る	遊び-タ]ク-なる	話-タ]ク-なる
-タクナイ	遊び-タク-ない	遊び-タ]ク-ない	話-タ]ク-ない

在来音調ではどの活用形でも起伏タイとの間に型の対立が起こるが、新型音調ではすべての活用形にわたって起伏タイと同じ型になってしまう。このことから、タイ節の音調変異とは中和を指向した現象にほかならないことが分かる。

また、在来音調から新型音調への変異のありようは、端的に述べると「起伏化」と表現できる。平板動詞に接続する「-タイ/-タク」は元来声の下がり目を持たないが、新型音調ではその初頭拍に下がり目が生じるからである。連用形「-タクナル/-タクナイ」に関しては、もともと「なる/ない」にあった下がり目が「-タク」の初頭拍

² 同じ連用形でもテ形「-タクテ」および過去形「-タカッ」では在来の音調においても対立が起こらない。平板動詞「アソブ=（遊ぶ）」と起伏動詞「ハナ]ス（話す）」を例にとると、テ形「遊びたくて」「話したくて」はいずれも/アソビ-タ]ク-て/・/ハナシ-タ]ク-て/のように「タク」の初頭拍で声が下がる。過去形も同様で、「遊びたかった」「話したかった」はともに/アソビ-タ]カ-つた/・/ハナシ-タ]カ-つた/のように「タカッ」の初頭拍で声の下がる。

に移動したとの解釈も可能であろうが、後に論じるように、連用形に関してもやはり起伏化と見るべき根拠がある³。ただ、連用形の場合、「なる／ない」を含んだ文節全体を領域として音調型の変動が起こる点には留意しておきたい。これは終止形・連体形には見られない構造上の特徴であり、それゆえタイ節の音調変異の全容を明らかにするには、終止形以外の活用形（とくに連用形）での実態を捕捉する作業が欠かせないというのが本稿の問題意識である。

3. 実態調査

3.1 調査の手法と内容

上述の問題意識に立って、本研究ではタイ節での新型音調の実態を探るための調査を行った。観察対象とした形式は次のとおりである。

- | | |
|---------------|---------|
| (4) a. 終止形 | -タイ。 |
| b. 連体形 | -タイ+名詞 |
| c. 連用形+ナル | -タクナル |
| d. 連用形+否定辞 | -タクナイ |
| e. 連用形+ナル+過去 | -タクナッタ |
| f. 連用形+否定辞+過去 | -タクナカッタ |

調査方法は短文読み上げ式で、上の諸形式を含んだ調査文を話者に読み上げてもらい、その音声を録音した。読み上げは各短文につき2回行った。話者は南関東地域出身の大学生25名である⁴。

調査に用いた短文は「先行文節 X+動詞 V+タイ（の活用形）」からなる連文節形式とした。また連体形については、タイの後ろに被修飾名詞（後続文節 Y）を置いた。それぞれの活用形について短文の一例を示す⁵。

³ 7.3節で論じるように、「-タクナイ」の新型音調では否定辞「ない」にも下降が残る。すなわち/比<ベ>[ク<ナ]イ/のようなダウンステップ音調で、この事実から、「-タクナイ」の新型音調は「タク」に新たに核が生成されることでもたらされるもの（すなわち起伏化）と解釈できる。なお(3)では説明の煩雑さを避けるため「ない」での下降はあえて示さないでおいた。

⁴ 東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県で言語形成期を過ぎた大学生で、調査時年齢は18～24歳。男性16名・女性9名。

- (5) a. 公園で遊びたい。 (終止形)
b. 公園で遊びたい子ども。 (連体形)
c. 公園で遊びたくなる。 (-タクナル)
d. 公園で遊びたくなった。 (-タクナッタ)
e. 公園で遊びたくない。 (-タクナイ)
f. 公園で遊びたくなかった。 (-タクナカッタ)

短文構成素の詳細は次のとおりである。まず、タイに前接する動詞 V は連用形で 1～4 拍の平板動詞とし、各拍数につき 2 語ずつ用意した⁶。

(6) 前接動詞 V

連用 1 拍	着(る)・寝(る)
連用 2 拍	行き・乗り
連用 3 拍	遊び・比べ(る)
連用 4 拍	働き・教わり

先行文節 X は前接動詞の内項名詞句または補充成分で、2～4 音節からなる。各動詞につき無核語／有核語を含む文節をそれぞれひとつずつあてた。一例を示す。

(7) 先行文節 X

X=無核	公園で (遊びたい)
X=有核	一人で (遊びたい)

(6)に挙げた 8 語の動詞すべてについて(7)のように無核文節と有核文節を前置したので、各活用形での短文の総数はそれぞれ 16 文となる。(ただし連体形は除く。)

連体形では後続文節 Y が加わる。2～3 音節からなる被修飾名詞である。これについても音調の別を考慮し、各動詞につき無核語／有核語をそれぞれ 1 つずつあてた。

⁵ 実際に用いた短文では、文意ができるだけ自然な発話に近くなるよう、当該連文節の前にもうひとつ別の文節を加えた(連体形は除く)。例：「暑いので公園で遊びたくない。」

⁶ 動詞の活用の種別については考慮していない。活用の種別がこの現象に有意な影響をもたらさないことについては栗木(2015:35)が確認しているため。

先行文節 Xでの音調の別を組み合わせると、連体形に関しては各動詞につき 4つの短文が作られることになる。組み合わせの一例を示す。

- | | | | |
|--------|------------|--------------|------------|
| (8) a. | 公園で遊びたい子ども | X=無核（コーエンデ=） | Y=無核（コドモ=） |
| b. | 公園で遊びたい男子 | X=無核（コーエンデ=） | Y=有核（ダ]ンシ） |
| c. | 一人で遊びたい理由 | X=有核（ヒト]リデ） | Y=無核（リユ=） |
| d. | 一人で遊びたい生徒 | X=有核（ヒト]リデ） | Y=有核（セ]ート） |

この4つの組み合わせが8語の動詞のそれぞれについて作られるので、連体形を含む短文の総数は32文となる。

以上の構成からなる短文を全部で112項目用意した（終止形16/連体形32/-タクナル16/-タクナイ16/-タクナッタ16/-タクナカッタ16）。これら112の短文を25名の話者に各2回ずつ発話してもらったので⁷、調査で得られた発話の総数は5600項目となる。

3.2 調査結果の概要

調査で得られた5600項目の発話のうち、3093項目において音調の変異が観察された。すなわち全項目の5割強（55.2%）において新型音調が生じていたことになる。この値は栗木（2015: 33）の調査結果（93%）と比べるとかなり低いが、栗木（2015）の調査が終止形だけを対象としたものであるのに対し、上の数値は終止形以外の活用形での調査結果も含んだ数値であるので、両者を直接比較することには意味がない。

本研究の調査で得られた55.2%という新型生起率は、多いとも少ないとも言い難い数値である。ただ、数値の多寡の判断は別として、半数以上の項目で新型音調が観察されたこと自体は注目に値する。この数値は、タイ節での音調変異が単なる言い誤りないし散発的な例外といった範囲を超えた、ある程度生産的な性質を帯びた現象であることを物語っている。

以下本稿では、調査結果を種々の観点から分析する作業を通じて、タイ節での音調変異の実態を記述するとともに、変異生成の機序について考察する。ここから先の議論では、とりわけ次に挙げる諸要因に注目して分析を進める。

⁷1回目の読み上げ（112項目）が一通り済んだ後で、もう一度同じ短文（112項目）を読み上げてもらおう方式とした。1回目と2回目とで調査票の構成（短文の配列）は同じである。なお、調査票の作成に際しては112項目の短文をランダムに配置した。

- (9) a. 活用形の違い (4 節)
 b. 前接動詞の拍数 (5 節)
 c. 周辺文節の音調 (6 節)
 d. 連用形の特性 (7 節)

4. 活用形と新型音調

4.1 活用形別の実態

表 1 は、調査結果を活用形別に示したものである。「N」は発話総数、「在来音調」は音調変異を起こしていない発話の数、「新型音調」は音調変異を起こしていた発話の数である。また図 1 は各活用形での新型生起率をグラフ化したものである。

表 1 調査結果 (活用形別)

活用形	N	在来音調(%)	新型音調(%)
終止形	800	162 (20.3)	638 (79.8)
連体形	1600	765 (47.8)	835 (52.2)
-タクナル	800	519 (64.9)	281 (35.1)
-タクナッタ	800	614 (76.8)	186 (23.3)
-タクナイ	800	171 (21.4)	629 (78.6)
-タクナカッタ	800	276 (34.5)	524 (65.5)
合計	5600	2507 (44.8)	3093 (55.2)

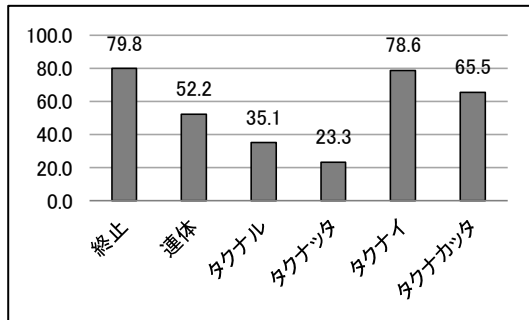


図 1 活用形別の新型音調生起率 (%)

新型音調の生起率には活用形によるばらつきが見られる。最も高い値を示したのは終止形で、次いで否定接続の連用形「-タクナイ」およびその過去形「-タクナカッタ」が続く。連体形での新型生起率は 5 割強にとどまる。また、述語動詞に続く連用形

「-タクナル」およびその過去形「-タクナッタ」では、いずれも5割を大幅に下回っていた。これらの結果について見るべきポイントは3つある。

第一に、終止形と連体形とでは前者のほうがより新型音調を生じやすい。終止形での新型生起率が79.8%にも達するのに対し、連体形では52.2%にとどまる。興味深いのは、これと同様の傾向が形容詞でのアクセント変化にも見られることである。形容詞においても本来平板型で現れるはずの語が起伏化する傾向が著しいが、この傾向は終止形においてより顕著であることが知られている（稲垣1984; 小林2003; 三樹2007, 2014）。助動詞タイはその活用の様態からして形容詞に類似した特徴を見せる付属語だが、上の事実は、タイが音調形成の面においても形容詞に似た特徴を持っていることを示唆している。

第二に、同じ連用形「タク」を含む形式であっても「-タクナル」と「-タクナイ」とでは新型生起頻度に著しい差が見られる。わけても後者のほうが圧倒的に高い割合で新型を生じている点が注目される。言うまでもなく、この差は共通要素である連用形「タク」の性質に起因するものとは考えられない。むしろ「タク」に続く要素「なる／ない」の側に原因を求めるのが妥当なところで、この点については後に第7節において詳細な考察を行う。

第三に、連用形含みの形式では現在形のほうが過去形よりも新型を生じやすく、これは「-タクナル／ナッタ」「-タクナイ／ナカッタ」のいずれにおいても変わるところがない。この場合、文法範疇としての時制がこの振る舞いを引き起こしているとは考えにくい。すなわち、過去のテンスを持つこと自体が新型音調を抑制する要因として作用しているとの説明はおそらく成り立たない。その根拠として、タイの単純な過去形（-タカッタ）ではむしろ在来の音調においてすでに中和が生じていることが挙げられる。たとえば平板動詞「遊ぶ」と起伏動詞「話す」に過去形「-タカッタ」がついた形式では、「遊び-タ]カッタ」「話し-タ]カッタ」のように、いずれも同じ拍で声が下がる。したがって、現在形と過去形での新型音調の生起頻度の違いはもっぱら音韻論的な観点からその理由を解き明かすことができそうである⁸。

4.2 終止形と連体形

⁸ 行論上の都合と本稿の考察の射程に照らして、この点に関する分析については別稿に譲ることとしたい。

最前指摘したように、タイの終止形と連体形はともに同じ外形をなす活用形でありながらも、前者のほうがより高い頻度で音調変異を生じやすい。また、これと同様の傾向は形容詞でのアクセント変化にも観察される。

形容詞には平板式で現れる語類（第Ⅰ類）と起伏式で現れる語類（第Ⅱ類）があるが、従来重ねて指摘されているように、両類の対立はここ半世紀以上にわたり中和に向かいつつある（清水 1958, 1970; 稲垣 1984; 馬瀬・佐藤 1989; 秋永 2001; 川上 2003; 小林 2003; 田中ゆかり 2003; 三樹 2008, 2014 など）。この中和は、本来平板式で現れるはずの第Ⅰ類形容詞が起伏化して第Ⅱ類形容詞と同じ型（語幹末型⁹）をとることで生じる。

(10) 形容詞アクセントの中和

語類	(a)		(b)	
第Ⅰ類（平板）	ツメタ-イ=	→	ツメタ]-イ	（冷たい）
第Ⅱ類（起伏）	ミジカ]-イ	=	ミジカ]-イ	（短い）

起伏化を契機として中和状態に至るというあり方は、タイ節の音調変異にも同様に認められる機序である。(1)(2)に見たように、タイ節においても本来平板式で現れる形式「平板動詞+タイ」が起伏化することで「起伏動詞+タイ」との中和が起こる。助動詞タイと形容詞との類似性は、まずはこうした中和に至る経緯の中に見いだすことができる。

また、形容詞アクセントの中和(10)は、終止形において生じやすい一方で連体形では比較的起こりにくいことが知られている。都内在住の中学生（1977～1979年当時）を対象に調査を行った稲垣（1984）によれば、第Ⅰ類形容詞が第Ⅱ類形容詞と同じ型（語幹末型）で実現される割合は(11)のとおりであったという（稲垣 1984: 286-287, 表 3・表 4 による）¹⁰。このこともまた、タイと形容詞の類似性を物語る事実である。タイ節においても、終止形が 8 割ほどの頻度で中和を生じる一方で連体形では 5 割程度にとどまるが（図 1）、この数値はとくに 4 拍形容詞での中和頻度の差(11b)と極めて近似している。

⁹ 語幹の末尾の拍で声の下がる型。事例は(10b)参照。

¹⁰ 同様の傾向は小林（2003）の調査でも報告されている。それによると、第Ⅰ類形容詞が語幹末型で発音される割合（「N-1 出現率」）は、終止形が 55%であったのに対して連体形は 6%にとどまっていたという。

(11) a. 3拍形容詞

終止形（単独）	63.3%
終止形（文末）	72.7%
連体形	49.3%

b. 4拍形容詞

終止形（単独）	82.3%
終止形（文末）	81.8%
連体形	54.5%

4.3 連用形

終止形および連体形に加えて、連用形に関してもタイと形容詞との間には類似した傾向が見られる。

本研究の調査では、タイ節連用形を含む形式として動詞接続の形「-タクナル」および否定接続の形「-タクナイ」を取り上げたが、4.1節で指摘したように、この二者では「-タクナイ」のほうがより新型音調を生じやすい。「-タクナル」での新型生起率が35.1%であるのに対し、「-タクナイ」では78.6%にも上る（図1）。

同様の傾向は形容詞連用形のアクセント変化にも見られる。三樹（2008, 2014）によれば、第Ⅰ類形容詞連用形のアクセントが第Ⅱ類形容詞連用形のそれと同じ型をとる（中和する）場合¹¹、その割合はやはり否定辞「ない」に続く形式のほうが動詞「なる」に続く形式よりも高いという。三樹（2014: 100-104）の示したデータに基づいて、第Ⅰ類形容詞連用形での中和音調の出現率を算出した結果を(12)に示す¹²。

(12) 第Ⅰ類形容詞連用形の中和音調（語幹末型）

3拍	アカ]-ク-ナイ（3.8%）	>	アカ]-ク-ナル（3.1%）
4拍	アカル]-ク-ナイ（14.4%）	>	アカル]-ク-ナル（7.5%）
5拍	アオジロ]-ク-ナイ（65.0%）	>	アオジロ]-ク-ナル（55.8%）
6拍	アマツタル]-ク-ナイ（67.2%）	>	アマツタル]-ク-ナル（54.4%）

拍数により数値に差はあるものの、否定接続の形「-クナイ」のほうが一様に高い確率で中和音調を生じる点は一貫している。

ここで形容詞連用形との対照のために、タイ節連用形に関しても拍数別の新型生起率を見ておくことにしたい。否定接続の形「-タクナイ」での音調実態については表

¹¹ 三樹（2014）で「A（Ⅱ類新型・語幹末）」と記述されている型で、語幹末尾の拍で声下がるもの。（...○○]-ク-ナイ／...○○]-ク-ナル）

¹² 三樹（2014: 100-104）では実数だけが示されている（表13～表20）。(12)の百分率はそれに基づいて本稿筆者が算出したもの。

2に、動詞接続の形「-タクナル」の音調実態については表3にそれぞれ示す。なお対照の便宜上、ここでの「拍数」は「前接動詞+連用形タク」からなる形式のものとする¹³。(たとえば2拍動詞を含む「乗りたく」は4拍の形式ということになる。)

表2 「-タクナイ」の音調実態

拍数	N	在来音調(%)	新型音調(%)
3拍	200	81 (40.5)	119 (59.5)
4拍	200	47 (23.5)	153 (76.5)
5拍	200	29 (14.5)	171 (85.5)
6拍	200	14 (7.0)	186 (93.0)
合計	800	171 (21.4)	629 (78.6)

表3 「-タクナル」の音調実態

拍数	N	在来音調(%)	新型音調(%)
3拍	200	164 (82.0)	36 (18.0)
4拍	200	157 (78.5)	43 (21.5)
5拍	200	109 (54.5)	91 (45.5)
6拍	200	89 (44.5)	111 (55.5)
合計	800	519 (64.9)	281 (35.1)

上表に示した数値のうち、とくに注目したいのは「新型音調(%)」の部分である。各拍数について表2「-タクナイ」と表3「-タクナル」とを比較すると、どの拍数においても「-タクナイ」のほうが高い頻度で新型音調を生じているのが分かる。この数値的事実を(12)に倣って整理したのが(13)である。(動詞の拍は○で示す。左端に示した拍数は「動詞+タク」の部分のそれである。)

(13) タイ節連用形の中和音調

3拍	○-タ]ク-ナイ (59.5%)	>	○-タ]ク-ナル (18.0%)
4拍	○○-タ]ク-ナイ (76.5%)	>	○○-タ]ク-ナル (21.5%)
5拍	○○○-タ]ク-ナイ (85.5%)	>	○○○-タ]ク-ナル (45.5%)
6拍	○○○○-タ]ク-ナイ (93.0%)	>	○○○○-タ]ク-ナル (55.5%)

形容詞連用形とタイ節連用形が同様の傾向を示していることは、(12)(13)の対照から一目瞭然である。先述の終止形・連体形に関する事実も含め、上に示した事実は、タ

¹³ この形式は、形容詞連用形では「語幹+語尾ク」からなる形式に相当する。

イ節に生じる音調変異がその機序において第Ⅰ類形容詞でのアクセント変化と性質のよく似た現象であることを明確に示している。

5. 前接動詞の拍数と新型音調

5.1 動詞拍数別の実態

タイ節での新型音調の生起頻度は、タイに前接する動詞（前接動詞）の長さによっても異なる。表4は前接動詞の拍数別に調査結果を示したものである。また図2は新型音調の生起率をグラフで示したものである。

表4 調査結果（前接動詞拍数別）

動詞拍数	N	在来音調(%)	新型音調(%)
1拍	1400	778 (55.6)	622 (44.4)
2拍	1400	724 (51.7)	676 (48.3)
3拍	1400	564 (40.3)	836 (59.7)
4拍	1400	441 (31.5)	959 (68.5)
合計	5600	2507 (44.8)	3093 (55.2)

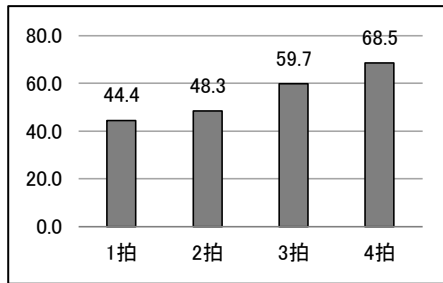


図2 前接動詞拍数別の新型音調生起率(%)

新型音調の生起率は前接動詞の拍数が増えるに従って高くなる。この事実から、タイ節での音調変異が語句の長さに敏感な現象であることが分かる。また、前接動詞の拍数は「動詞+タイ（の活用形）」からなる文節の長さに対応することから、上の結果は、文節のサイズが増すにつれて新型音調が生じやすくなることを意味している。

ただし、前接動詞の拍数と新型生起との対応のあり方は、活用形により異なる様相を見せる。表5・図3は動詞拍数ごとの新型生起率を活用形別に示したものである。

表5 活用形別に見た前接動詞拍数と新型生起率(%)

V 拍数	終止	連体	-ナル	-ナイ	-ナッタ	-ナカッタ
1拍	83.0	47.3	18.0	59.5	18.0	38.0
2拍	79.0	40.5	21.5	76.5	13.5	66.5
3拍	78.0	53.5	45.5	85.5	23.5	78.5
4拍	79.0	67.5	55.5	93.0	38.0	79.0

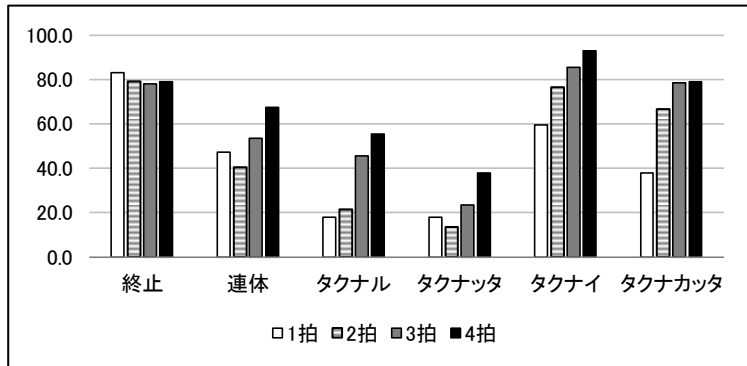


図3 前接動詞拍数と新型生起率 (活用形別)

グラフの概形からもうかがえるように、各種活用形の中でも唯一終止形だけは他とは異なる特徴を見せている。連体形以下の各形式では前接動詞の拍数と新型生起率との間に図2で見た傾向にほぼ準じた対応が見られるのに対して、終止形だけは前接動詞の拍数による違いがほとんど見られず、どの拍数においても8割前後の高頻度で新型音調が生じている。

この結果は、終止形がその本来の性格として音調変異(起伏化)を許容しやすい活用形であることを示唆している。終止形が現れるのは原則として文末であるが、この位置では他所にはない特有の韻律現象として、終端下降 (final lowering) が生じるのが特徴である (Poser 1984; Pierrehumbert and Beckman 1988; 前川 2013)。終端下降はその名のとおり文末でのピッチの下降によって特徴づけられる現象だが、起伏化もまたピッチ下降を伴う型への変異にほかならず、この点において両者は矛盾しない。すなわち終止形は起伏化の好発環境なのであり、そのことが他の活用形には見られない特異な振る舞い(前接動詞の拍数を問わず高い頻度で新型音調を生じること)につながっているものと考えられる。

5.2 類似の諸現象

ところで、アクセントに何らかの変化が生じる際に当該形式の拍数に変化の成否に影響することは、従来しばしば指摘される機会の多い事実である。わけても興味深いのは、タイ節での音調変異と同じく、もともと平板の形式が起伏化することによって音調が中和するタイプの諸現象において、語句の拍数に敏感な振る舞いが共通に見られることである。

そうした事例のひとつに、複合動詞におけるいわゆる「山田の法則」の衰退がある。複合動詞の伝統的なアクセントでは、前部動詞の音調と反対の音調が複合動詞全体に現れることが知られている。前部動詞が起伏式であれば複合動詞全体は平板式となり(=14a)、前部動詞が平板式であれば、複合動詞全体は次末拍で声の下がる起伏式となる(=14b)。

(14) 山田の法則

- | | | |
|----|------------|----------------|
| a. | ハレ]ル (晴れる) | ハレアガル= (晴れあがる) |
| b. | ハレル= (腫れる) | ハレアガ]ル (腫れあがる) |

しかし、現在ではこの法則の衰退が著しく、前部動詞の音調の違いを問わず一律に次末型に中和する流れにある（菅野ほか 1982; 菅野 1989; 相澤 1992; 塩田 1998, 2013）。この中和は、かつて平板式で現れていた複合動詞（例：晴れあがる）が起伏化することで生じる。

(15) 音調の中和

- | | | |
|----|------------|----------------|
| a. | ハレ]ル (晴れる) | ハレアガ]ル (晴れあがる) |
| b. | ハレル= (腫れる) | ハレアガ]ル (腫れあがる) |

塩田（2013: 248）はアナウンサーを対象としたアクセント調査の結果に基づいて、この変化に「『全体の拍数が長くなるほど、平板型の支持率が低くなる』という傾向が見て取れる」ことを明らかにしている。「平板型の支持率が低くなる」とは、本来平板型で現れるはずの複合動詞（「晴れあがる」など）が起伏化して実現される機会が多くなることを意味する。塩田（2013）の示すデータ（p.249, 図 1）によると、前部要素に起伏動詞を含む複合動詞では全体の拍数が増すにつれて平板型支持率が下がり、4拍語では 65%であったものが 5拍語・6拍語ではそれぞれ 43%・21%に低下す

るといふ。これは換言すると、複合動詞の拍数が増すほど法則に従わない起伏化音調が増加するとの謂いであり、この振る舞いはまさしくタイ節での音調変異のあり方と軌を一にする。

このほかに同様の特徴を示す現象としては、第Ⅰ類形容詞でのアクセント変化が挙げられる。形容詞のアクセント変化についてはすでに4.2節と4.3節で触れたが、ここで再び、今度は拍数に着目して事実を見ておきたい。

まず終止形・連体形での変化(起伏化)に関しては、稲垣(1984)の報告に挙げられている数値(11)が最も明瞭であろう。終止形/連体形の別を問わず、3拍形容詞よりも4拍形容詞のほうが起伏化率が高い。

連用形にも拍数とアクセント変化との対応が見られる。形容詞連用形のうち「なる」「ない」に続く形式の音調には本来それぞれ二型の対立があるが、終止形・連体形と同様、ともに中和に向かう傾向が指摘されて久しい(清水 1958, 1970; 稲垣 1984; 馬瀬・佐藤 1989; 秋永 2001; 川上 2003; 小林 2003; 田中ゆかり 2003; 三樹 2008, 2014 など)。連用形では、第Ⅰ類において語幹に声の下がり目が生じる傍ら(=16a)、第Ⅱ類では核が語幹次末拍から最終拍へと移動することで(=16b)、結果的にどちらも語幹末型となって中和する¹⁴。(ここでは「クナル」形を代表例として挙げる。)

(16) 音調の中和

- a. 第Ⅰ類 アカ-ク-ナル → アカ]-ク-ナル (赤くなる)
- b. 第Ⅱ類 シ]ロ-ク-ナル → シロ]-ク-ナル (白くなる)

このうち第Ⅰ類連用形での変化(16a)については、やはり拍数に敏感な性質があることが指摘されている。三樹(2014: 107)は第Ⅰ類での変化について「4拍語と5拍語との間で出現数に大きな差があり、5拍語で一気に増える」ことを明らかにしている。この点に関する数値的事実はすでに本稿(12)にも示したとおりであるが、ここであらためて拍数に着目した形で示す。(三樹(2014: 100-104)のデータに基づく。)

¹⁴ 形容詞連用形のゆれアクセントとしては常に語幹末型だけが現れるわけではない。実際には第Ⅰ類に/アカ]ルークナイ/のような第Ⅱ類伝統型と同じ型のゆれが生じたり、あるいは第Ⅱ類に/シロクナイ/のような第Ⅰ類伝統型と同じ型のゆれが起きたりすることもある(田中ゆかり 2003, 2010; 三樹 2008, 2014)。

- (17) 第 I 類形容詞連用形での中和音調（起伏化）の出現率（[]内は拍数）
- | | | | | |
|---------|------------|-------------|-------------|-------------|
| a. -クナイ | [3] : 3.8% | [4] : 14.4% | [5] : 65.0% | [6] : 67.2% |
| b. -クナル | [3] : 3.1% | [4] : 7.5% | [5] : 55.8% | [6] : 54.4% |

「クナル」では若干順当でない部分（5拍語>6拍語）があるが、総じて見れば拍数と中和音調の出現率との間には対応が認められる。また、表2・表3および表5に示したように、同様の対応はタイ節連用形にも見られる。形容詞連用形との対照のために、(17)に倣う形でタイ節連用形での中和頻度を示しておく。

- (18) タイ節連用形での中和音調の出現率（[]内は「前接動詞+タク」の拍数）
- | | | | | |
|----------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| a. -タクナイ | [3] : 59.5% | [4] : 76.5% | [5] : 85.5% | [6] : 93.0% |
| b. -タクナル | [3] : 18.0% | [4] : 21.5% | [5] : 45.5% | [6] : 55.5% |

第 I 類連用形およびタイ節連用形での音調中和は、ともに起伏化を契機とする点で機序を共有する現象であるが、起伏化の頻度が語句の拍数に応じて増す傾向を示す点においても、両者は並行的な振る舞いを見せている。

5.3 拍数の境界

ところで、語句の長さと変異の生起頻度との対応をめぐっては、ひとつ見落としてはならない重要な事実がある。(17)に示した第 I 類形容詞連用形での中和音調の出現率を再度見ると、4拍語と5拍語の間に極めて顕著な数値の開きがあること（三樹 2014）に気づくが、この振る舞いはたまたま形容詞だけに生じたものとは考えられない。なぜなら、同様の実態がタイ節の音調変異に関しても見られるからである。

ここで、表4に示した数値をあらためて精査しなおしてみたい。タイ節での新型音調の生起率は前接動詞の拍数が増えるに従って上昇するが、この上昇は単調に生じているわけではない。前接動詞が2拍である場合と3拍である場合とでは新型音調の生起率に大きな開きが認められ、前者で48.3%であったものが後者では59.7%へと急伸する。

試みに、表4に示したデータを「前接動詞2拍以下」と「前接動詞3拍以上」の二群に大別して比較してみると、両者では新型音調の生起数に相当な隔たりがあることが分かる（表6）。2拍以下の群に比べ、3拍以上の群では新型の出現数が有意に多いのである（ $\chi^2(1)=177.671, p<.001$ ）。

表 6 V2 拍以下 : V3 拍以上

	在来型	新型	合計
V=1・2 拍	1502	1298	2800
V=3・4 拍	1005	1795	2800
合 計	2507	3093	5600

前接動詞が2拍以下/3拍以上であるということは、換言すると「前接動詞+タイ」からなる文節のサイズが4拍以下/5拍以上であることと等しい。つまり、タイ節での音調変異もまた「4拍語と5拍語との間で出現数に大きな差があり、5拍語で一気に増える」との三樹 (2014: 107) の指摘に通じる振る舞いを見せていることになる。

ところで、窪菌 (2004) が明らかにしているように、4拍と5拍との間に音韻的な境界が介在することを示唆する事実は、日本語の形態・音韻現象において幅広く観察される。それらの現象に共通するのは、当該形式のサイズが5拍以上の長さに至ると規則的な音韻パターンがにわかに安定して現れやすくなることである。複合語や外来語のアクセントなどはその好例である。

たとえば2拍語を後部要素に含む複合名詞では、形態素境界の直前の音節に下がり目を生じるパターン(前核型)が最も生産的に現れるが、その規則性は複合名詞全体の長さが5拍以上である場合に安定している一方で、4拍以下の形式では例外が生じやすい。一例として「川」を後部に持つ複合名詞のアクセントを示す¹⁵。

- | | |
|-----------------------|----------------|
| (19) a. しなの]-がわ (信濃川) | b なか]-がわ (那珂川) |
| いしかり]-がわ (石狩川) | とね-がわ= (利根川) |
| ドニエプル]-がわ | よど-がわ= (淀川) |
| ブラマプトラ]-がわ | き]-の-かわ (紀ノ川) |
| セントローレンス]-がわ | へ]-い-がわ (閑伊川) |

5拍以上の形式(19a)が一貫して前核型をとるのは対照的に、4拍以下の形式(19b)では前核型のほかに平板型や語頭型も現れる。

同様の事実は外来語のアクセントにも見られる。外来語アクセントの形成過程にはいわゆる「-3規則¹⁶」が働くが (McCawley 1968)、5拍以上の外来語の多くがこの

¹⁵ (19b)の例およびアクセントの記述はNHK (1998: 16) による。

¹⁶ 語末から3つ目のモーラを含む音節にアクセントを与えるというもの。

規則に従うのに対して、4拍の外来語では約3割で平板型が起こるほか（Kubozono 1996）、3拍の外来語でも次末モーラで声の下がる型（ブル]ー、スピ]ン、トラ]イ）が見られるなど（Kubozono 1996, 1999）、-3規則に従わないパターンが起こりやすくなる。つまり4拍と5拍の間には規則性の強さの境界があり、これは複合語であれ外来語であれ変わるところがない。

こうした境界性はタイ節の音調変異においても働いていると見られる。タイ節に生じる音調変異とはすなわち起伏化現象にはほかならないが、表6に示した数値的事実は、「前接動詞+タイ」からなる文節のサイズが5拍以上の長さを持つと起伏化がより生産的に生じやすくなることを示している。したがって、タイ節に生じる音調変異もまた、5拍以上という長さが規則性を活性化させるサイズであることを示す証拠のひとつになり得る。

6. 周辺文節の音調

6.1 先行文節の音調

3.1節で述べたように、本研究の調査ではタイ節に先行する文節の音調の別に配慮して調査文を作成した。これは先行文節の音調の違いによりタイ節での新型音調の生起頻度に差が起こることが予測されたためである¹⁷。実際、無核文節先行環境と有核文節先行環境とでは新型音調の生起率に違いが見られた。表7～表12は、先行文節の音調とタイ節の音調との関係を活用形ごとに示したものである。

表7 終止形

		在来(%)		新型(%)		合計	$\chi^2(1)$
先行文節	無核	60	(15.0)	340	(85.0)	400	13.011, $p < .001$
	有核	102	(25.5)	298	(74.5)	400	
	計	162	(20.2)	638	(79.8)	800	

表8 連体形

		在来(%)		新型(%)		合計	$\chi^2(1)$
先行文節	無核	320	(40.0)	480	(60.0)	800	38.514, $p < .001$
	有核	445	(55.6)	355	(44.4)	800	
	計	765	(47.8)	835	(52.2)	1600	

¹⁷ 那須・栗木（2015）は、同じく式保存型の付属語である「ナガラ」の音調形成において、周辺文節の音調が新型の生起頻度に有意な影響をもたらしていることを明らかにしている。

表 9 連用形 (-タクナル)

		在来(%)	新型(%)	合計	$\chi^2(1)$
先行文節	無核	232 (58.0)	168 (42.0)	400	15.996, $p < .001$
	有核	287 (71.7)	113 (28.3)	400	
計		519 (64.9)	281 (35.1)	800	

表 10 連用形過去 (-タクナッタ)

		在来(%)	新型(%)	合計	$\chi^2(1)$
先行文節	無核	289 (72.6)	109 (27.4)	398	6.941, $p < .01$
	有核	323 (80.7)	77 (19.3)	400	
計		612 (76.7)	186 (23.3)	798	

表 11 連用形 (-タクナイ)

		在来(%)	新型(%)	合計	$\chi^2(1)$
先行文節	無核	50 (12.6)	348 (87.4)	398	34.965, $p < .001$
	有核	119 (30.0)	278 (70.0)	397	
計		169 (21.3)	626 (78.7)	795	

表 12 連用形過去 (-タクナカッタ)

		在来(%)	新型(%)	合計	$\chi^2(1)$
先行文節	無核	100 (25.1)	298 (74.9)	398	29.064, $p < .001$
	有核	174 (43.5)	226 (56.5)	400	
計		274 (34.3)	524 (65.7)	798	

表 10~12 では「合計」欄右下の数値が表 1 の「N」欄に示した数値と一致していないが、これは、先行文節内の名詞のアクセントを辞典記載のものとは異なる型で発音したデータを除外したためである。すなわち平板名詞が起伏式で、起伏名詞が平板式で発音されていたデータは除いた¹⁸。ここでの検討課題は先行文節の音調とタイ節の音調変異とのかかわりを見ることなので、こうした処理が必要である。

一連の表に示した数値から、どの活用形でも新型音調は無核文節が先行する環境において生じやすく、反対に有核文節が先行する環境では抑制される傾向にあることが見て取れる。すなわち、先行文節の音調指定（核の有無）はタイ節での音調変異の成

¹⁸ 具体的には、平板名詞「布団」を起伏式/フト]ン/と発音したものが 6 項目、起伏名詞「気分」「企業」を平板式/キブン=、キギョー=と発音したものがそれぞれ 1 項目・3 項目あった。表 10~12 と同じ処理は、連体形に関する分析（表 13・14）においても行った。/キブン=/（気分）の 1 例がそれにあたる。

否を有意に左右する要因なのであり、とりわけ「有核文節が先行すること」は、変異を抑制する方向に働きかける要因として作用していることが分かる。

6.2 後続文節の音調（連体形）

先行文節の音調に加え、タイ節に後続する文節（被修飾名詞）の音調もまた、新型生起頻度を左右する要因として働く。被修飾名詞を含むのは連体形のみであるが、表 13 に示す結果からうかがえるように、無核語が後続する形式と有核語が後続する形式とでは、起伏化の生じる頻度に有意な差が見られる。無核語が続く形式が新型音調を作りやすい一方で、有核語が続く形式では新型生起率が相対的に低い。

表 13 後続文節の音調とタイ節音調（連体形）

		在来(%)		新型(%)		合計	$\chi^2(1)$
後続文節	無核	352	(44.0)	448	(56.0)	800	9.167, $p < .01$
	有核	413	(51.7)	386	(48.3)	799	
計		765	(47.8)	834	(52.2)	1599	

また、連体形に関しては、先行文節と後続文節の音調に(8)に示したような4通りの組み合わせがあるが、この組み合わせと新型音調の生起率との間には、極めて明瞭な対応が見られる。表 14 は、先行文節 X・後続文節 Y の音調の組み合わせ別に、タイ節連体形の音調の実態をまとめたものである。また図 4 は新型生起率を各組み合わせ別にグラフで示したものである。

表 14 周辺文節音調の組み合わせとタイ節（連体形）の音調

組み合わせ		N	在来音調(%)	新型音調(%)
[A]	X 無核・Y 無核	400	143 (35.8)	257 (64.3)
[B]	X 無核・Y 有核	400	177 (44.3)	223 (55.8)
[C]	X 有核・Y 無核	400	209 (52.3)	191 (47.8)
[D]	X 有核・Y 有核	399	236 (59.1)	163 (40.9)

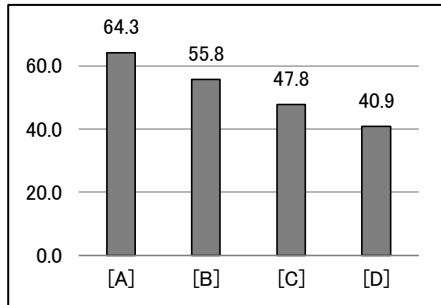


図4 周辺文節音調の組み合わせと新型音調生起率(%)

連体形での新型生起率は $X \cdot Y$ がともに無核である形式[A]において最も高く、反対に $X \cdot Y$ がともに有核である形式[D]では最も低い。その中間に $X \cdot Y$ の音調指定の異なる形式が挟まる形になるが、このとき、 X が無核である場合[B]のほうが有核である場合[C]よりも新型生起率が高い。

6.3 有核連鎖の回避

これまで見てきた事実は、いずれもタイ節の周辺に有核文節があると音調変異が抑制されやすくなることを示しているが、この振る舞いは、大きく見れば異化現象の一種として解釈できる。

タイ節での音調変異は、起伏化をその本質的な相とする現象である。したがって、有核文節が近傍に存在する条件下で音調変異が生じると、結果的に有核文節の連鎖が形成されることになる。一例として「車に乗りたい」と「ボートに乗りたい」の2文で起伏化が生じた場合の音調構造を示す。({ } は連文節を、() は文節を表す。また U/A はそれぞれ無核/有核を意味する。)

- (20) a. { (クルマニ) (ノリタイ) } {UA} (車に乗りたい)
 b. { (ボートニ) (ノリタイ) } {AA} (ボートに乗りたい)

無核文節先行環境(20a)ではタイ節が起伏化しても有核連鎖は生じないが、有核文節先行環境(20b)では起伏化が生じると連文節内に有核連鎖{AA}が起こる。後者において

音調変異が起こりにくい傾向にあることは¹⁹、こうした有核連鎖を作り出す方向への構造変化が避けられていることを意味する。

一方、在来音調では、そもそも起伏化自体が起こらないので有核連鎖の生じる余地はない。

- (21) a. {(クルマニ⇒)(ノリタイ⇒)} {UU} (車に乗りたい)
 b. {(ボ]ートニ)(ノリタイ⇒)} {AU} (ボートに乗りたい)

重要なのは、この状態から音調変異（起伏化）が生じると、無核文節先行環境では有核連鎖が起こらないのに対し、有核文節先行環境では有核連鎖が作られてしまうことである。

- (22) a. 無核文節先行環境 {UU} → {UA} (車に乗りたい)
 b. 有核文節先行環境 {AU} → {AA} (ボートに乗りたい)

先に表7～表12に示した事実に基づくと、(22)に挙げられている4種類の音調構造のうち、タイ節の音調変異の過程でより好まれやすいのは{UA}および{AU}の2種であることになる。{UA}は無核文節先行環境で起伏化が生じた場合に得られる構造であり、一方で{AU}は、有核文節先行環境で起伏化がむしろ生じないことで残る構造である。

この両者に共通するのは、どちらも音調指定の異なる構成をとっていることである。先にタイ節の音調変異に観察される振る舞いを「大きく見れば異化現象の一種」と述べたのは、まさしくこの点に由来する。まず無核文節先行環境(22a)では、起伏化を起こすことによって在来の音調構成からの異化{UA}が果たされる。他方、有核文節先行環境(22b)では、起伏化がむしろ抑制されることで、在来の音調構成にもともと備わっていた異化状態{AU}が維持される。タイ節での音調変異の成否は周辺文節の音調により左右される性質があるが、この振る舞いからは、音調指定の異なる連鎖（異化構造）が選好されるという一貫した機序を見いだすことができる。

¹⁹ ちなみに(20a)「車に乗りたい」と(20b)「ボートに乗りたい」での新型音調の生起率は、前者が60%であるのに対して後者では30%にとどまる。

7. 連用形の問題

4.1節(表1・図1)で指摘したように、連用形含みのタイ節の音調には、否定辞接続の「-タクナイ」のほうが動詞接続の「-タクナル」よりも明らかに新型音調を作りやすいという際立った特徴がある。ここでは本稿最後の考察課題として、連用形「タク」を含む形式の音調について検討する。

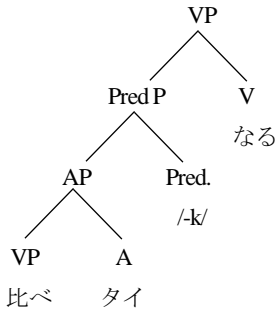
7.1 統語構造

「-タクナル」と「-タクナイ」はどちらも4拍の長さからなる形式であり、唯一、連用形「タク」に続く要素だけが異なる。ただし、後続要素「なる」「ない」はいずれも語頭音節に声の下がり目を持つ2拍形態素である点で、音韻的な性格に関しては特段隔たっているわけではない。したがって「-タクナル」と「-タクナイ」での新型生起頻度の差に影響する要因があるとすれば、それは音韻構造以外の側面にあると考えるのが順当なところであろう。端的に述べると、両者の統語上の性質の違いが新型生起頻度の差に何らかの形で関与している可能性が考えられる。

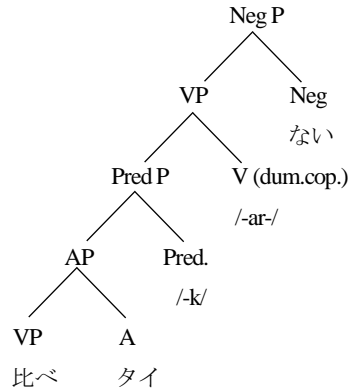
線形順序で見ると、「なる」「ない」はそれぞれ連用形「タク」に隣接する位置に現れる。しかし、統語階層での両者の出現位置は異なっている。「-タクナル」文と「-タクナイ」文の統語構造をNishiyama (1999)で示された理論に基づいて示すと(23)のようになる²⁰。この図でまず目につくのは統語階層の数の違いである。連用形「タク」を含む階層(Pred P)までは両者に共通しているが、問題はその上の階層で、「-タクナル」文では動詞句VPがPred Pの直上に生じるのに対して、「-タクナイ」文では否定辞「ない」の投射Neg PとPred Pとの間にダミーのコピュラ成分(dom.cop./-ar-)が介在する。このため「-タクナイ」文のほうが階層がひとつ多くなる。

²⁰(23)ではタイ節を形容詞句(AP)として位置づけているが、この位置づけについては、助動詞タイと形容詞が音調変異の機序において一致した特徴を有していることを論じた第4節での考察がその根拠となり得よう。また、Nishiyama (1999)の分析によれば、形容詞を含む句構造には真性のコピュラ成分(Pred.)とダミーのコピュラ成分(dum.cop.)が含まれるとされる。前者には形容詞の活用語尾「ク」が相当し、後者にはラ変「アル(-ar-)」が相当する。(なお「ク」はさらにkに抽象化される。)

(23) a. 比べたくなる



b. 比べたくない



また、両者では階層の最上位にある範疇の種類が異なる。「-タクナル」文が全体として動詞句 VP をなすのに対して、「-タクナイ」文では否定辞句 Neg P が全体を支配する位置にある。この違いは両者の音調上の振り舞いの違いをとらえるうえで大きな意味を持つ。とくに「-タクナル」文が動詞句をなすという点は、以下に論じるように、この形式での新型生起頻度の相対的な低さを説明するうえで重要な手がかりになる。

7.2 動詞句音調の維持

動詞句では、その主要部に起伏動詞が位置する場合、常に句の次末拍に声の下がり目が起こる（-2型）。

(24) ～をと]ル（取る）、～とハナ]ス（話す）、～をシラベ]ル（調べる）

「-タクナル」に含まれる「なる」も起伏動詞であるので、これを含む動詞句の音調もまた-2型になるが、ここで注目したいのは、この-2型が「平板動詞+タクナル」の在来音調に等しいことである。つまり「-タクナル」の在来音調は動詞句に固有の音調が具現したパターンにほかならない。

(25) 在来型（－2型）

乗り-タク-ナル	（乗りたくなる）
笑い-タク-ナル	（笑いたくなる）
働き-タク-ナル	（働きたくなる）

一方、この形式で音調変異が生じると、「-タク」の初頭拍に核が移ることにより－2型が崩れることになる。

(26) 新型（非－2型）

乗り-タ]ク-ナル	（乗りたくなる）
笑い-タ]ク-ナル	（笑いたくなる）
働き-タ]ク-ナル	（働きたくなる）

「-タクナル」に生じる新型音調(26)とは、つまるところ、動詞句の本来の音調である－2型を維持するか、それとも音調中和を起こすことでより単純な体系を目指すかという²¹、拮抗する2つの要求のうち後者が選択された結果起こるパターンとして見ることができる。

ここで、「-タクナル」では新型音調の生起頻度が著しく低いという事実をあらためて想起したい。図1に見たように「-タクナル」での新型生起率はわずか35.1%にとどまるが、この顕著な事実に対しては次の説明が可能であろう。「-タクナル」では中和要求よりも在来の－2型を維持する要求のほうが強く働いていると見られる。つまり、動詞句本来の音調を犠牲にしてまで新たな構造変化（中和）を起こすことが避けられるために、「-タクナル」では新型音調の生起頻度が鈍るものと考えられる。

翻って、「-タクナイ」では逆に新型音調の生起頻度が著しく高いが、これは「-タクナイ」の述部が動詞句相当の範疇でないことによる。「-タクナイ」文は全体として否定辞句をなすので、動詞句に固有の－2型の維持が求められる余地はない。すなわち「-タクナイ」には新型音調の生成を阻害する要因がなく、そのことが78.6%という極めて高い新型生起率につながっていると考えられる。

²¹ タイ節での音調変異がその性格として中和現象と解されることについては2.2節(3)での議論を参照。

7.3 ダウンステップ

ところで、「-タクナイ」の音調には「-タクナル」には見られない注意すべき特徴がある。「-タクナイ」の新型音調では声の下がり目が「タク」に起こるが、同時に、否定辞「ない」にも副次的な下がり目が残りやすい。/比べ-タ|ク-ナ|イ/のような音調で、このようなパターンは今回の調査で採取した発話の多くで観察された。図5はそのF0曲線動態を描出したものである。これを見ると、「ない」でのピッチの下降は先行する「タク」での下降に比べて低い周波数域で生じていることが分かる。すなわちダウンステップ音調である。

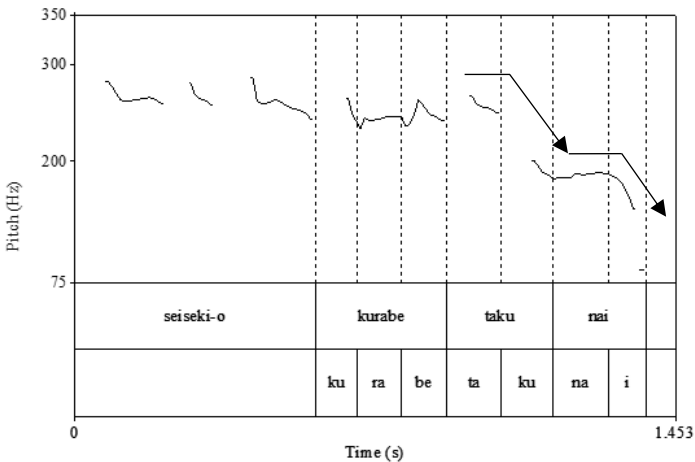


図5 「(比べ)-タクナイ」新型音調のF0動態

これに対して「-タクナル」ではダウンステップが見られず、「タク」の初頭拍で声下がった後は文末まで一気に下降し続けるパターンが目立つ。「-タクナル」を含む短文のF0曲線動態を図6に示す。図5・図6に見るF0動態の違いは、「-タクナル」が単一の音調句をなすのに対して「-タクナイ」では音調句が2つに分かれていることを示唆する。すなわち「-タクナイ」では否定辞「ない」が独立の音調句を作っている。

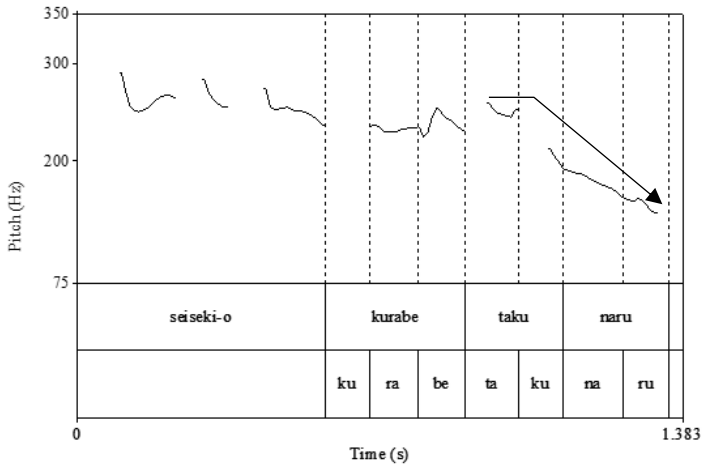


図6 「(比べ)-タクナル」 新型音調のF0動態

こうした音調句の分離は「-タクナイ」の統語的特性に由来する振る舞いだと考えられる。(23b)に示したように「-タクナイ」ではNeg PがPred Pから見て一階層分浮き上がった位置にある。すなわちPred Pの直上にダミーのコピュラ成分(dum.cop.)が介在するためNeg Pが独立の音調句を作りやすく、その結果「ない」での副次的下降を伴ったダウンステップ音調が起こりやすいものと考えられる。

7.4 構造保持と音調中和

加えてここで見逃してはならないのは、否定辞「ない」で声の下がるというあり方が、そもそも「-タクナイ」の在来音調を特徴づける振る舞いにほかならないという事実である。(27)に示すように、「-タクナイ」では在来音調においても新型音調においても「ない」に声の下がり目が生じる。

- (27) a. 比べ-タク-ナイ (在来音調)
 b. 比べ-タ]ク-ナイ (新型音調)

つまり、「-タクナイ」ではたとえ音調変異が生じて、否定辞「ない」に声の下がり目が生じるという特徴自体は損なわれることがない。

この点は7.2節で論じた「-タクナル」との顕著な違いとして特筆すべき事実である。「-タクナル」では新型音調への変異に伴って動詞「なる」での声の下がり目（動詞句本来の-2型の特徴）が失われ、そのことが新型生成を阻害する要因に結びついていたが、一方で「-タクナイ」では新型音調が生じても否定辞「ない」での下降が失われることはない。

- | | |
|---------------------------|-------------------------------------|
| (28) a. -タクナル | b. -タクナイ |
| i. 在来 比ベ- <u>タク-ナ</u>]ル | i. 在来 比ベ- <u>タク-ナ</u>]イ |
| ii. 新型 比ベ- <u>タ</u>]ク-ナル | ii. 新型 比ベ- <u>タ</u>]ク- <u>ナ</u>]イ |

新型生成に伴う構造変化の大きさという観点から見ると、「-タクナル」と「-タクナイ」とでは明らかに前者の方がその規模が大きい。「-タクナイ」では「ない」での下降を維持したまま「タク」に下降が追加されるだけであるのに対して、「-タクナル」では「なる」の下降を消したうえで「タク」に下降が加わるからである。

「-タクナル」と「-タクナイ」での新型生起率の著しい差は、「なる／ない」でのこうした構造変化の規模の違いに起因すると考えられる。この点は、次の一般化を導くことでより明瞭な形でとらえることができる。

(29) 最上位にある句 XP の主要部 X に含まれる下降を維持せよ。

「最上位にある句 XP の主要部 X」とはこの場合、述部の最終要素「なる／ない」を指す。また「主要部 X に含まれる下降」とは「なる／ない」での下降のことであり、この下降はすなわち「-タクナル」および「-タクナイ」の在来音調(28ab-i)に含まれる特徴にほかならない。つまり(29)は在来音調での下降位置が維持された状態を求めるものであることから、ある種の構造保持制約として位置づけられる。重要なのは、「-タクナル」の新型音調(28a-ii)がこの制約に抵触する一方で、「-タクナイ」の新型音調(28b-ii)はこの制約を満たす範囲で生じていることである。

この点に照らすと、「-タクナル」と「-タクナイ」での新型音調生起率の違いは、構造変化に対する抵抗の強弱に起因する事実としてとらえることができる。タイ節の音調変異は結果的に対立の中和につながる点で体系の単純化を指向する現象だと言えるが、そうした指向性に抗う要因（構造保持制約(29)への抵触）が「-タクナル」にはあっても「-タクナイ」には存在しない。「-タクナイ」ではいわば構造変化を引き留

める抵抗がないために体系の単純化に向かう変異が生じやすく、その一方で「-タクナル」の場合は、構造変化への抵抗が残る分だけ中和への指向性が弱く、その結果、新型音調の生起頻度が鈍るものと分析できる。タイ節連用形での音調変異は、こうした中和指向と構造保持指向とのせめぎあいの狭間で生じているのである。

8. おわりに

本稿では、タイ節に生じる音調変異の実態を録音調査の結果に基づいて明らかにした。「平板動詞+タイ（の活用形）」を含む全 5600 項目のうち、5 割強にあたる 3093 項目（55.2%）において起伏化を伴う新型音調が観察された。

また本稿では、活用形の違い・前接動詞の拍数・周辺文節の音調・連用形含みの形式での統語構造の違いにより、新型音調の生起頻度が影響を受けることを明らかにした。

まず活用形については、終止形および「-タクナイ」において新型音調が 8 割弱の高頻度で生じやすい一方で、連体形および「-タクナル」ではそれぞれ 5 割程度・3 割程度にとどまるという実態がとらえられた。終止形のほうが連体形よりも変異を生じやすいこと、および、同じ連用形含みの形式でも「-タクナイ」のほうが「-タクナル」より変異を生じやすいことは、形容詞におけるアクセント変化の振る舞いと軌を一にする。このことから、助動詞タイと形容詞が音調の側面においても特徴を共有していることが明らかになった。

拍数による影響をめぐっては、タイに前接する動詞の拍数が増えるに従って新型音調が現れやすくなるという実態がとらえられた。こうした振る舞いは複合動詞および形容詞でのアクセント変化にも観察される。タイ節での音調変異も含め、これらの現象ではいずれも、元来平板式で実現されていた形式が起伏化することで音調の中和が起ころのが特徴である。このことから、語句の拍数と変異生起頻度との対応は、起伏化を契機とする音調中和現象一般に共通する機序であると結論できる。

ただし、この対応の実態は活用形によって異なる。終止形を除く各活用形では前接動詞の拍数の増加に伴って起伏化率も上昇するが、終止形に関してはそうした順当な対応が見られず、前接動詞の拍数を問わず高い頻度で起伏化が生じる。本稿では、終止形におけるこうした特異な実態が、文末位置での終端下降とかかわりのある振る舞いであるとの分析を示した。

加えて本稿では、タイ節の近傍に有核文節が存在すると起伏化が生じにくくなる傾向があることを明らかにした。起伏化とは有核化にほかならないことから、この傾向は有核文節の連鎖する構造が避けられていることを意味する。有核文節が付近に存在することは、タイ節での音調変異を抑制する方向に働きかける要因として作用している。

最後に本稿では連用形「タク」を含む形式における音調変異の機序について考察し、構造変化に対する抵抗の強弱が「-タクナル」と「-タクナイ」での新型生起率の差をもたらしていることを明らかにした。「-タクナル」の新型音調では動詞句に固有の音調（-2型）が崩される分だけ構造変化の規模が大きく、そのことが中和を阻害する要因として働く。対して「-タクナイ」では新型音調が生じても否定辞「ない」での下降が維持されるため、構造変化を最小限に留めたまま中和が果たされる。

なお、タイ節の音調変異をめぐるのは、連用形含みの形式において現在形のほうが過去形よりも変異を来しやすいという事実（図1）も見られた。この点については事実と見通しを述べるに留めたが（4.1節）、タイ節での音調変異の機序をより十分に解き明かすうえで、さらなる考察が必要な問題であることに変わりはない。この問題については今後の探究課題としたい。

付記 本稿は、科学研究費（基盤研究(C), 17K02673）による助成を受けた研究の成果の一部をまとめたものである。なお本研究の一部の内容については関西音韻論研究会（PAIK）において研究発表を行い（那須 2017）、その折に参加者から有益なコメントを多数いただいた。記して感謝申し上げたい。

参考文献

- 相澤正夫（1992）「進行中のアクセント変化－東京語の複合動詞の場合－」『研究報告集』13, 195-265, 国立国語研究所。
- 秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典』東京:三省堂。
- 稲垣滋子（1984）「アクセントのゆれに関わる要素について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題2』東京:明治書院, 281-307。
- NHK 放送文化研究所編（1998）『新版 NHK 日本語発音アクセント辞典』東京:NHK 出版。
- NHK 放送文化研究所編（2016）『NHK 日本語発音アクセント新辞典』東京:NHK 出版。
- 川上泰（2003）「東京アクセント末核型の行方」『國語研究』66, 1-11。

- 菅野謙 (1989) 「山田美妙のアクセントと現代共通語のアクセント」 『大正大学大学院研究論集』 13, 71-94.
- 菅野謙・臼田弘・最上勝也・宗像朋子 (1982) 「NHK アナウンサーのアクセント 19 年の変化」 『NHK 放送文化研究所年報』 27, 271-334.
- 木部暢子 (1983) 「付属語のアクセントについて」 『国語学』 134, 23-42.
- 窪菌晴夫 (2004) 「音韻構造から見た単純語と合成語の境界」 音声文法研究会編『文法と音声 IV』 東京: くろしお出版, 123-143.
- 栗木風香 (2015) 「首都圏地域における動詞接続付属語アクセントの変容」 平成 26 年度筑波大学大学院教育研究科修士論文.
- 郡史郎 (2015) 「助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き 一直前形式との複合形態の観点からの分析」 『言語文化共同研究プロジェクト 2014』 63-74, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 小林めぐみ (2003) 「東京語における形容詞アクセントの変化とその要因」 『音声研究』 7(2): 101-113.
- 匂坂芳典・佐藤大和 (1983) 「日本語単語連鎖のアクセント規則」 『電子情報通信学会論文誌 D』 66(7), 849-856.
- 塩田雄大 (1998) 「アクセントは [ウツリカワル] ～アナウンサーアクセント調査報告②「複合動詞」～」 『放送研究と調査』 48(8), 48-57.
- 塩田雄大 (2013) 「NHK アナウンサーのアクセントの現在 一複合動詞を中心に」 相澤正夫編『現代日本語の動態研究』 東京: おうふう, 236-258.
- 清水郁子 (1958) 「東京アクセントの近況」 『音声学会会報』 97, 19-23.
- 清水郁子 (1970) 「東京方言のアクセント」 平山輝男博士還暦記念会編『方言研究の問題点』 東京: 明治書院, 134-172.
- 田中宣廣 (2005) 『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』 東京: おうふう.
- 田中ゆかり (2003) 「首都圏方言における形容詞活用形アクセントの複雑さが意味するもの —「気づき」と「変わりやすさ」の観点から—」 『語文』 116, 119-95, 日本大学国文学会.
- 田中ゆかり (2010) 『首都圏における言語動態の研究』 東京: 笠間書院.
- 那須昭夫 (2017) 「「～たい」節の音調中和」 関西音韻論研究会 (PAIK) 研究発表 (2017 年 9 月 16 日, 神戸大学)
- 那須昭夫・栗木風香 (2015) 「若年話者に生じつつある付属語アクセントの変化 —ナガラ節での起伏化傾向—」 『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』 128-133.

- 前川喜久雄（2013）「日本語自発音声における final lowering の生起領域」第 27 回日本音声学会全国大会。
- 馬瀬良雄・佐藤亮一（1989）「東京語アクセントの多様性」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声（上）』東京：明治書院, 206-232.
- 三樹陽介（2007）「首都圏方言形容詞アクセントの多様性」『國學院大學大学院紀要－文学研究科－』39, 171-182.
- 三樹陽介（2008）「首都圏方言の形容詞アクセントの複雑さ－「-クナイ」「-クナル」形を例に－」『國學院雑誌』109(7), 1-15.
- 三樹陽介（2014）『首都圏方言アクセントの基礎的研究』東京：おうふう。
- 和田實（1969）「辞のアクセント」『國語研究』29, 1-20.
- Kubozono, Haruo（1996）Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. 『音声学会会報』211, 71-82.
- Kubozono, Haruo（1999）Mora and syllable. In N. Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*. Oxford: Blackwell, 31-61.
- McCawley, James, D.（1968）*The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Nishiyama, Kunio（1999）Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8, 183-222.
- Pierrehumbert, Janet B. and Mary Beckman（1988）*Japanese Tone Structure*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Poser, Williams, J.（1984）*The Phonetics and Phonology of Tone and Intonation in Japanese*. Ph.D. dissertation, MIT.

なす あきお／人文社会系
（2017年11月13日受理）